

「特集」 戦後75年 戦争の記憶を語り継ぐ



直江津捕虜収容所での朝会（写真提供：竹田清徳さん）

今年で、第2次世界大戦の終結から75年を迎えます。

この戦争によって、上越市でも辛く悲しい出来事が起こり、多くの大切な人の命が失われまされた。このような悲劇を繰り返さないためにも、地域で起こった出来事を、次の世代に語り伝えていくことが大切です。

■問合せ：共生まちづくり課
（☎025・526・5111、内線1761）

直江津捕虜収容所

「戦時中、市内にあった「捕虜収容所」で起きた悲劇」

昭和17年12月、関川河口近く（現在の川原町）に「直江津捕虜収容所」が開設され、当初300人のオーストラリア兵が収容されました。厳しい寒さと飢えに加え、軍需工場での過酷な労働や不衛生な環境もあり、60人が亡くなりました。

その後、収容所にはアメリカやイギリス、オランダなどの捕虜を加え、最も多い時には700人余りが収容されていたといわれています。

戦後、戦争犯罪に関する裁判において、捕虜を虐待・死亡させたとして、国の方針に忠実に従った収容所の職員15人が有罪となり、内8人が悲痛な遺書を残して処刑されました。

「悲劇を乗り越え平和の公園へ」

昭和53年7月、直江津捕虜収容所に収容されていた元オーストラリア兵から届いた一通の手紙をきっかけに、市民との交流が始まりました。

過去の歴史を乗り越え、悲劇の地を世界平和と友好を願う場所とする公園の設立の市民運動が興り、平成7年、市民と市が協力して平和記念公園を整備しました。

この公園には、オーストラリア兵60人と職員8人を偲んだ2つの記念碑が建てられました。公園の整備に尽力した市民により設立された「上越日豪協会」が、公園と公園内にある展示館を拠点に直江津捕虜収容所の悲劇を語り継いでいます。

平成15年、上越日豪協会とオーストラリアの豪日協会などの交流をきっかけに、上越市は、オーストラリア・カウラ市と「平和友好交流意向書」を取り交わし、現在も交流を続けています。



平和記念公園内の「平和友好像」

直江津空襲

「県内最初の空襲が、直江津であったことを知っていますか？」

昭和20年5月5日の午前11時過ぎ、アメリカのB29爆撃機1機が飛来し、直江津の工場地帯を標的に爆弾を投下しました。爆弾は工場に命中しなかったものの、近くの水田や倉庫に着弾しました。この爆撃により、水田で農作業中だった人と黒井駅近くの倉庫で作業中だった人、合計3人が亡くなったほか、5人が負

傷しました。

この空襲は、犠牲者が出たにもかかわらず、情報統制により翌日の新聞では「被害は皆無であった」と報道されたのでした。

「今も残る空襲のあと」

空襲から35年後の昭和55年に三ツ屋地内、さらに時を経て、平成6年と18年に安江地内で、それぞれ不発弾が見つかり、自衛隊によって処理されました。

直江津空襲の被弾の地となった黒井公園には、平成3年5月5日に慰



黒井公園内の直江津空襲・黒井被爆の地標柱

霊碑が建てられ、毎年5月5日に「直江津空襲と平和を考える会」による慰霊祭が行われています。

名立機雷爆発事件

「名立漁港に悲劇を伝える地蔵と石碑がまつられています」

戦後の昭和24年3月30日の午後4時頃、名立小泊の海岸に国籍不明の機雷が流れ着き、その様子を見ようと子どもを含む地域の大勢の住民が集まりました。

警察官が機雷を沖へ押し出そうと海へ飛び込んだ直後の午後5時23分、波で大岩に接触した機雷が、大きな音とともに爆発しました。

「事件を風化させないように」

この爆発で、小学生36人、中学生7人、幼児13人を含む63人が一瞬にして亡くなり、着ていた衣服で見分けることができない状況であったといえます。

事件の翌年、「機雷爆発の地」と記された石碑が、現場である海上の二つ岩の上に建てられました。その後、国道の拡張工事に伴い、遺族によって建てられた地蔵尊とともに、平成22年に現在の位置に移設されました。この事件を後世に伝えるため、平成



名立漁港に建つ地蔵尊と爆発の地を示す石碑

■平和展

～市内の戦争にまつわる出来事～

今回紹介した市内で起きた出来事をはじめ、戦争と平和をテーマにした資料展示を行っています。



▶とき…8月16日㊿までの午前10時～午後6時（16日は午後3時まで）▶ところ…小川未明文学館（高田図書館内）▶問合せ…共生まちづくり課（☎025-526-5111、内線1761）※7月27日㊿、8月3日㊿、11日㊿は休館。

■平和祈念の黙とうをお願いします

8月6日と9日は、広島と長崎に原子爆弾が投下された日です。投下された時刻に全国各地で原爆死没者の冥福を祈り、黙とうをささげます。また、8月15日は、「戦没者を追悼し、平和を祈念する日」として黙とうをささげます。市民の皆さんも黙とうをお願いします。
▶とき…8月6日㊿午前8時15分（広島）、8月9日㊿午前11時2分（長崎）、8月15日㊿正午 ▶問合せ…福祉課（☎025-526-5111、内線1108）

特別対談

次代へ語り継ぐ、戦争の記憶と平和への思い

戦争の記憶の語り部である「上越日豪協会」、「直江津空襲と平和を考える会」、「名立・平和を願う日実行委員会」の皆さんと、昨年、市の「広島平和記念式典中学生派遣事業」に参加し、今年高校生となった6人が、普段の生活の中ではあまり触れられることのない、身近な地域で起きた戦時中の出来事を通じて、お互いの思いを語り合いました。

「はじめに語り部の皆さんから、活動への思いについて、お聞かせください。」

石井浩順さん（名立・平和を願う日実行委員会） 機雷爆発事件が起こった名立だからこそ、伝えられることがあると思います。「名立・平和を願う日」の式典などを通じて、平和の尊さや命の大切さを若い世代や青少年たちに伝えていかなければと考えています。

関勝さん（上越日豪協会） 定年を迎えたとき、趣味の英語をいかして何かやりたいと思い、上越日豪協会に加わり、捕虜収容所のことを知りました。高校生の皆さんからは、上越にも戦争の悲惨な出来事があったことを知っていただけて、二度と戦争を起こしてはならないという思いを持ってほしいです。

関川幹夫さん（直江津空襲と平和を考える会） 直江津の収容所にいた捕虜たちは、近隣の大きな工場に働いてもらうために連れてこられました。工場では、戦争に行つた大人たちの代わりに、13歳から15歳の若い人たちも働いていたんです。直江津空襲は、工場を狙った爆弾が外れて隣の畑に落ちたとされていますが、私は味方の捕虜が工場に働いていること知っていて、わざと外したのではないかと考えています。



「語り部」の皆さん。右から、石井浩順さん、関勝さん、関川幹夫さん。

「す。このような悲しい出来事を実際に見聞きした人も少なくなってきました。そういった時代の背景も、皆さんからは理解してもらいたいと思います。」

「語り部の皆さんのお話を聞いて、どんなことを考えましたか。」

横尾純さん 実際に戦争を体験していないからこそ感じるものがたくさんあると思います。私たちの目線から伝えられることもあると思うので、いろいろなことを考えて、平和な世界に近づけていけたらいいなと思いました。

佐川大成さん 「伝えていく」ことが大切だと感じました。皆さんの伝えていくための熱意や姿勢が本当にすごいと思いました。僕たちも受け継いでいかなければいけないと強く感じました。

永田睦月さん 直江津の方言で、長男のことを「あんちゃ」、次男のことを「もしかあんちゃ」と呼ぶんだと、祖父が教えてくれました。「あんちゃ」が戦争に出たり空襲で亡くなったりしたときに、もしかしたら次男が「あんちゃ」の代わりになるかもしれないというのでそう呼ぶそうです。戦時中は、身近な人の死がそんなに近いものだったということに驚きました。これからは、平和について考え

ていきたいと思いました。高橋倫太郎さん 戦争を体験した人がほとんどなくなり、話を聞く機会も少なくなっていくと思うので、このような機会をいただけた僕たちが、後世に語り継いでいく役割を担っていかなければならぬと強く感じました。

渡邊蒼彩さん 戦争の一番辛いところは、罪の無い人が命を落とすということだと思いましたが、私は名立に住んでいるので、機雷爆発事件について当たり前のようになっていますが、知らない人も多いので、私たちと同じような年頃の人が多く亡くなった悲惨な事実など、名立だからこそ、上越だからこそしっかりと伝えていかなければいけないと思います。



対談に参加いただいた高校生の皆さん。前列右から横尾純さん、永田睦月さん、渡邊蒼彩さん、後列右から佐川大成さん、高橋倫太郎さん、渡邊結真さん。

「子どもたちは知っているのですが、その両親は知らない人が多いのです。皆さんのご両親は、上越の戦争被害を知っていますか。」

横尾純さん 私の曾祖父が戦争に行つて、片腕がない状態で帰ってきました。祖母に「なんでこの写真のおじいちゃんは腕がないの」と聞いたことがきっかけで、家族で話すということになりましたが、上越で起きた身近な出来事などは知らないのではないかと思います。

永田睦月さん 私の母は直江津で生まれ育ちましたが、直江津空襲のことは知らなかったと言っていました。

渡邊蒼彩さん 両親はどちらも名立出身なので、機雷爆発事件は知っています。捕虜収容所などの話は知りませんでした。

永田睦月さん 学校の授業で直江津捕虜収容所のことを学んだとき、元オーストラリア兵捕虜の方が平和記念公園の慰霊碑に手を合わせてくださったという話を聞いた覚えがあります。そのときのことを少し聞かせてください。

関勝さん 元捕虜の方が訪れた際、これまでオーストラリア側の石碑にだけ献花し、虐待した日本人側の石碑には献花していただけませんでした。5年ほど前、献花をお願いしたところ、「戦争が

あったことは70年前のことだから、昔のことは忘れましょう」といって、日本人の慰霊碑にも、献花してくださいました。

「最後に、平和への思いを受け継ぐ皆さんの思いをお聞かせください。」

横尾純さん 私たちにもできることを企画したり、こういうイベントを開いたりするなど、できることは積極的にやっていきたいと思いました。

佐川大成さん 伝えていくために、自分から学ぼうとする姿勢を持ちたいと思います。

永田睦月さん 私たちの親世代も戦争について知る機会がないので、家族など身近な人に戦争などの話ができるようにしたいです。

高橋倫太郎さん 戦争を知る人や体験した人は少なくなってきたので、僕たちがしっかりとバトンを受け取って、小さなことから行動を起こし、平和につなげていけたらと思っています。

渡邊蒼彩さん 家族や身近な人から伝えていくことで、その人から他の人へと伝播して、戦争の悲劇を語り継いでいきたいと思います。

渡邊結真さん 実際の話を聞く機会は減ってくるので、今度は自分たちが身近な人からより多くの人に伝えていきたいなと思いました。

「みなさん、本日はありがとうございました。」

対談の様子を配信しています

市ホームページでは、対談の様子を動画でご覧いただけます。ぜひ、ご覧ください。

